
IS ~ 一夏の(非)日常 ~

ころり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（一夏の（非）日常）

【Nコード】

N7773V

【作者名】

ころり

【あらすじ】

朝起きると、人参型のカプセルがあつてっ!?

ひよんなことから、小さくなってしまった一夏

これぞ、一夏の（非）日常

このの時間軸は在ってないようなものなので、よろしく願います。ちなみにオリキャラは出す予定です。

PROLOGUE (前書き)

どうも、初投稿のころりです。

ISにもこんな日常があればなぁと、思い…書かしていただきま
した。

基本的には、戦闘は無し、シリアスも(多分)無い、ただのギャグ
の塊です。

PROLOGUE

「んーっ！よく寝た」

清々しい朝を迎えた俺。

俺の名前は織斑一夏、世界で唯一インフィニット・ストラトス、通称《IS》を動かせる男子だ。

何故世界で唯一かって？

それはISは女性にしか動かせない機械だからなんだよ。

その例外、イレギュラーが俺なのだ。

俺がISを動かせる事が分かったのは、高校受験の時…。

受けるべき高校、藍越学園とIS学園の会場を間違えてしまったのだ。

その時、会場にあつたISに触れたら動いた。

ただそれだけだ。

周りからしたら一大事だったんだろうが、今の俺の方が一大事だよっ！

さつきも言つたとおり、ISは女性にしか使えない、つまりIS学園には男子が一人もないっ！

これを地獄と言わず、何と言えようかつ！

はーっ！はーっ！お、落ち着け、俺。

まあ、自己紹介はこれくらいにしてだな…。

「これなんだ？」

俺が見た視線の先には、人参型のカプセルがあつた。

「これってやつぱり…」

人参にはボタンが付いていて、その横に「押してみても書かれた紙が張ってあり、怪しさ満天だ。

「もしかしてもしかするとだけど…押してみるか」

ポチッと音が鳴り、人参が縦に割れた。そして中から出てきた人は

「やあやあ、いっくん、相変わらずカッコいいねえ」

篠ノ之束さんだった。篠ノ之束、ISの産みの親であり俺の幼馴染み、篠ノ之篁の実姉である。

それにしても、いつもいつも変な登場の仕方での人ホントに天才発明家なのだろうかと思うよ…。

『何とかと天才は紙一重』ってことなのかな？

「いつくん、今、束さんに失礼な事考えたでしょ、考えたよね〜？」
ぎくっ！

「か、考えてませんよ〜、あ、あはははは」
考えたが誤魔化す俺…。

「と、ところで何故俺の部屋に？」

話題を逸らしたんじゃないよ？

本題に入っただけ、うん。

「そーだった、今日はいつくんにお願いがあつてきたんだよお」

…『お願い』なんて物はいつも千冬姉が箒にする筈なんだけどな？

「なんですか？」

とりあえず、聞いてみるに限る。

「それはだねえ、新薬の実験d…、ゲフン、被験者になって欲しいんだよね〜」

今この人実験台って言ったぞっ！？

「さあさあこの薬を飲んでよ、いつくん」

謎の薬を飲むことを強要されて、室外に逃げだそうとする。

「この天才束さんに抜かりは無いのだよ、いつくん」

ガチャガチャッ！

「鍵が開かないっ！？」

「内側からは絶対に開かないからね〜、ほら、覚悟を決めて飲んじやおうよ、いつくん」

束さんがどうやら扉に何かしたらしい…。

「誰がそんな謎の薬を飲む馬鹿が…ムグッ！？」

束さんに瓶ごと口に突っ込まれた。

「束さんの勝利っ！やった〜」

「ゲホツ、ゴハツ…、な、な、何してくれてんですかッ!？」
と、言いながら、さっきの薬を吐き出そうとする。

「大丈夫だよ、いっくん。死にはしない…!」

「本当ですか?」

その言葉に救われ…

「…多分」ボソッ

無かった…。

「ええええええッ!?!」

多分って言ったッ!?!この人言ったよねッ!?!最低だあああッ!

「じゃね、いっくん」

ズドドドド!

束さんは人参に乗り込んで飛んで行ってしまった。「どっかのエイリアンか何かかよ…、じゃなくて、薬を飲まされたんだからどうなってるか確認しないとッ!」

鏡をのぞき込み、異常がないか確認する。

「ふう〜、取り越し苦労だったか…、良かったあ」

コンコン

「一夏、入るぞ?早く起きて食堂に…行く…ぞ…ッ!?!」

幼馴染みの筈が入ってきて早々、何かに驚いたようだ。

「い、一夏、なのか?お前…いや、その少年…!」

は?何を言ってるんだろ、筈は。

「当たり前だよ、僕は一夏だよ」

ん?ちよつと待て、今、俺は自分のことを『僕』って言わなかったか?

「そ、それならば、何故そんなに身体が小さいのだッ!?!」

「なあああああッ!?!」

PROLOGUE (後書き)

つかりた〜、PSPではさすがにキツイですorz

分かりにくい場面、質問などは感想に書いといて下さい。
返事と一緒に書き込んどきます。

感想待ってます〜

ただしイケメンに限る！（前書き）

更新できた。

なんか嬉しいな。

駄文+長文のコンボです。

ただしイケメンに限る！

「つまり、うちの愚姉が一夏に変な薬を飲み、こんな姿になってしまった、と？」

「そうなんだよ。それで満足した東さんは逃げたつとこだ」

朝、小さくなつた俺と起こしに来てくれた箒で現状を話し合っていた。

「……一度、千冬姉に相談するってのはどうだ？」

俺は箒に聞いてみた。

「フム、私もそれがいいと思うのだが……、だが一夏、どうやって千冬さんに相談するのだ？」

箒の意見はもつともだ。

『千冬姉、俺が一夏だ』つて言っても、多分千冬姉は信じてくれな
いだろうな。

「だけど、今、千冬姉以外に頼れる奴なんて……」

「私がいるだろうツッ!!」

箒が大きな声でそう言った。

しかし箒は熱くなりすぎたと思ったのか、すぐに謝ってきた。

「す、すまん……」

箒を怒らしてしまった。

「俺が悪いんだから謝るのは俺の方だ。ごめんな、箒」

「ふ、ふんっ!…!ノノノ」

やっぱり、怒らせちゃってるな。

箒に嫌われたかな？

コンコンッ

ドアを叩く音が聞こえたので、俺と箒はベットの中に隠れた。

「〜! (誰か来たみたいだぞ?どうする、箒)」

俺が小声で箒に聞く。

「…ッ（お前の状態をバレるわけにはいかないし…、仕方ない、居留守を…）」

箒と俺でどうするかを悩んでいたら、ドアの外から声が聞こえてきた。

「一夏、起きてる？」

タタタツ

「今、篠ノ之の部屋に行ったのだが、もぬけの空だったぞ。食堂にも居ないようだ」

「ありがとう、ラウラ。僕も一夏を呼んでるんだけど、返事がないんだ」

スタスタ

「おはよ あれ、一夏くんの部屋の前でなにしてるの？シャルちゃん、ラウラちゃん」

「あ、楯無さん。一夏と箒さんがいないんです。箒さんの部屋には誰もいなかったようだし、一夏の部屋にいるのかなっと思って…」

「…中には入ったの？」

「いや、まだだ。私の嫁が浮気などするはずが無いからな」

「じゃあ、入りましょう」

「えっ？でも…」

「大丈夫よ、会長権限で入るだけだから」

「あ、あははは…」

箒と俺はドアの外から聞こえてくるやり取りを聞いて、固まっていた。「…（どうするッ！？箒）」

俺は困り果てて、箒に助けを求めた。

「…！（わ、私に聞くなっ！）」

そういうもめている内に、部屋のドアが開けられた。

「おはよー 一夏くん、起きなさい」

「一夏、おはよう」

「一夏、早く起きろ。だらしないぞ!」

そこで三人の時間が止まった。

・状況 篠ノ之箒が織斑一夏の部屋で、年端も行かない少年をベツトの中に押し倒している。

・結論 なにやってんの!?

「箒ちゃん…、おねーさんは温かい目で見守ってあげるわ…」

と、言つて楯無さんは冷たい目で箒を見た。

「箒さんに…、そんな趣味がっ!?!?…ば、僕で良かったら、理解ぐらいはできると思うよ…」

シャルは理解できないつて顔をしていた。

「…これがシヨタコンと言う奴か、本当に男の子を襲うものなのだな…」

ラウラに至つては、何かに納得してるし…。

「ち、違つっ!これは…」

箒は必死に弁明しようと頑張っている。

「まあ、他人の性癖をとやかくはおねーさん言わないわよ。ところで箒ちゃん…」

しかし楯無さん…、やっぱり箒を冷たい目でみるんですね…。

箒はその冷たい目にたじろぎながらも答える。

「…なん…ですか?」

「一夏くん知らない?」

ビクッ!

俺と箒が同時に固まった。

「…」

箒が黙りこくつてる。

箒なら匿ってくれるよな?

「……夏なら…」

ほ、篝さん？まさか…

「一夏ならここにいますよ、この少年が一夏ですッ！」
ギャアアアアアッ！

ちよつとツ！？

前言撤回、信用できるのは千冬姉だけだッ！。

つか、篝さん。何故俺をそんなに睨む、今は俺が悪いのッ？

「…は？」

三人は思いつ切り『なに言ってるの？こいつ…』って顔で篝を見ている。

「はあ、言うしかなさそうだな…」

-. -. * -. -. * -. -. * -. -. * -. -. * -. -. * -. -. * -. -. *

「なるほど、つまりそのちっさいのが一夏くんってこと？」
「…はい」

これまでの経緯を三人に話した。

「篠ノ之博士…凄いな…」

シャルは呆れとも感嘆ともとれる顔で呟いた。

「むう…（ジー）」

ラウラは何故かこちらをジッと見ている。

「だいたいのは分かっただけど、どうしようかしら…」

楯無さんは珍しく悩んでいる。

ホントに珍しい。槍でも降りそうだ。

思い立ったが吉日みたいなのが…。

まあ、周りからすれば吉日から凶日に早変わりなんだけど。

「一夏くん、今物凄く失礼な事考えたでしょ？おねーさんに言ってみなさい」

「い、いえ、全く、そんなことは…」

誤魔化す俺。

「正直に言わないとた・べ・ちゃ・う・ぞ」
「すいませんッ！」

土下座になる俺。

「…そんなに嫌がらなくても…」ボソリ…

「はい？どうかしましたか？」

よく聞こえなかったので聞き返してみた。

「ハア…何でもないわ、やっぱり一夏くんよね」

あれ？何か失望された？何故？

「そんなことより、どうするの？一夏。その姿じゃ…」

シャルは割と本気で考えてくれてるみたいだ。

「いつそのこと、そのまま受けてはどうだ？一夏」

筈は面倒くさくなったのか、投げやりな答え。

筈が考えを放棄する、なんて言ったら、殺されるだろうから言わない。

「そうだな、ここはもう開き直ってこのまま行ってみるか。いい案浮かばないしな」

俺はこのまま授業を受けることを決意した。

「…可愛い」

ラウラがよく分からない事をいいだした。

「……は？」「……」

綺麗にラウラ以外の声がハモった。

「嫁…、わ、私のことラウラお姉ちゃんと呼んでくれないか？」

「ラウラ…お姉ちゃん…？」

ラウラが意味が分からないお願いしてきた。

「あ、ラウラちゃんだけ狡い、私も楯無お姉ちゃんって呼んで？」

楯無さんまでよく分からないことを…。

あ、楯無さんがよく分からない（馬鹿な）のは元からか。

良かった、正常で。

「一夏くん…後で生徒会室で『オハナシ』しましょうね」
「楯無さんからどす黒いオーラが駄々漏れだ。」

なんでみんなして心が読めるの？

「分かりました、呼べばいいんですね？楯無お姉ちゃん」

俺はよく分からないが、殺されそうだったので呼ぶことにした。
呼んでも実害無いしな。

「はう…／＼／」

楯無さんは顔を真っ赤にする。

どうしてだろう？

「顔が真っ赤ですよ？楯無お姉ちゃん」

「ななな何でもないわよっ!？」

何でもないらしいので、俺は引き下がる。

「そうですか？分かりました。でも気を付けて下さいね、風邪は引きじめが肝心なんですから」

「わ、わわかつたわ／＼／」

「…むう」「」

楯無さんにそう注意すると、シャル・ラウラ・篝が羨ましそうな目で楯無さんを見ていた。

そんなに風邪を引きたいのか？

コイツ等の考えてることは分からん。

はあ…、それにしてもこの姿で授業…か。

大丈夫かなあ…？

ただしイケメンに限る！（後書き）

どうでしたか？

前回の通り質問何でも受け付けますので、感想にでも…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7773v/>

IS～一夏の（非）日常～

2011年11月9日05時25分発行